

メモワール論序説

大和田 俊之

アメリカの書店に「メモワール」というジャンルの棚がある——そのことに気づいたのはいつ頃だろうか。

もちろん、昔から回想録というジャンルはあるし、大統領などの著名な政治家が引退後に自叙伝を刊行するのはごくごく一般的である。だが、とりわけ2000年以降、メモワールというジャンルはそれまでの自叙伝や回想録とは若干異なる性質を帯びてきているのではないか——アメリカの書店を訪れるたびにその印象は強まっていた。

簡単にいえば、有名人やセレブリティだけでなく、無名の一般人がメモワールを執筆するようになったのだ。ロレイン・アダムズによって「ノーバディー・メモワール」(nobody memoir)と名付けられた一連の作品によって、このジャンルがいつしか作家の知名度に依存しなくなっていることが明らかになった。

アイルランドでの幼少時代を振り返るフランク・マコートの『アンジェラの灰』、マクスウィーニーズ社を創設したデイヴ・エガーズによる『驚くべき天才の胸もはりさけんばかりの奮闘記』、さらに鬱病の日々を綴ったエリザベス・ワーツェルの『私は「うつ依存症」の女』など、作品を発表する以前はほぼ無名だった人々による回想録がベストセラー・リストに名を連ねる。¹それは逆に言えば、「メモワール」というジャンルそのものが定着した結果ともいえるだろう。

つまり、現在アメリカにはミステリーやファンタジーと同じ意味で「メモワール」というジャンルが存在しているのだ。そして、それは必然的に「メモワリスト (memoirist)」と呼ばれる作家の存在に焦点を当てることに繋がるだろう。

彼女たち／彼らはひとつの作品が多く読者に恵まれると、別のメモワールを執筆する。ミステリーやファンタジーの約束事を遵守し、そのジャンルに特化した作家がいるように、メモワールというジャンルに専従する作家がいると考えた方がいいかもしれない。

たとえば、『うそつきくらぶ』などの著作で知られるメアリー・カーは、これまでに数冊の詩集のほかに三作の著書を刊行しているが、そのいずれもがメモワールである。²もともと友人のトバイアス・ウルフにメモワールの執筆を勧められたそうだが、『うそつきくらぶ』がベストセラーになって以来、彼女はその続編を刊行し続けている。また、『路上の文豪、酔いどれジョナサンの「幻の傑作」』の著者ニック・フリンも、同作で文学賞

を受賞したことでメモワールをさらに二冊刊行した。³カーとフリンは、二人とも詩人としてデビューしながら今ではメモワリストとして知られている点も共通している。

同じように作家の有名性に依存しないメモワールとして、「シュティック・リット (shtick lit)」、あるいは「スタント・メモワール (stunt memoir)」と呼ばれるサブジャンルについて触れる必要があるだろう。その名が暗示するように、それは著者がなにか変わった趣向のプロジェクトに従事した記録を出版したものである。このジャンルの第一人者、A・J・ジェイコブズは、ときに百科事典全巻の読破を試みたり (『驚異の百科事典男』)、聖書の教えに忠実に従ってみたり (『聖書男』)、さらに健康に良いとされていることをすべて試してみたりと (『健康男』)、自身の人生を実験台にさまざまなことに取り組んでいる。⁴

しかし、よく考えるとこれは奇妙な現象ではないだろうか。そもそもメモワールはひとりの作家が何作も執筆できるものなのだろうか。そしてそれは、従来の「自伝」というジャンルとどのように異なるのだろうか。

もちろん、西洋文学はアウグスティヌスやジャン・ジャック＝ルソーにまでさかのぼる「自伝」の伝統を有しているし、そうした文学史がいくぶんロマン主義的ともいえる「天才」至上主義によって構築されていることも今では常識とっていいだろう。その意味では「無名性」(nobody)を謳う昨今のメモワールとは対照的だと言えるのかもしれない。また、「自伝」が人生全体を描くものであるのに対して、メモワールはテーマがより絞られており、限定された期間を扱うものだと主張するものもある。⁵

あるいは、メモワールのアメリカ的起源として「インディアン捕囚体験記 (Indian captivity narrative)」や「回心体験記 (conversion narrative)」、さらには「奴隷体験記 (slave narrative)」などといった植民地時代の定型的なナラティブに思いを馳せることもできるだろう。思えば、ヘンリー・デイヴィッド・ソローの『ウォールデン』も、ある種の「スタント・メモワール」として読むことができるのかもしれない。

いずれにしても、メモワールというジャンルが1990年代後半以降、アメリカ合衆国で盛り上がりを見せていることは確かである。全米の書籍販売の70%をカバーするといわれるニールセン・ブックスキャンによれば、2004年から2008年までに「パーソナル・メモワール」、「チャイルドフッド・メモワール」、「ペアレンタル・メモワール」などのメモワール関連ジャンル全体で400パーセント以上の増加をみたという。⁶

こうしたメモワールの流行をどのように理解すれば良いのだろうか。

インターネットの普及によって誰もが容易に「作家」になれるようになったことがひとつの要因としてあげられるだろうし、9.11以降に無名の人々の物語にスポットライトが当てられたこと——ポール・オースターのナショナル・ストーリー・プロジェクトもすぐに思い浮かぶだろう——とも関連しているかもしれない。そして、こうした歴史的背景のも

とで、読者はフィクションではなく真実を求めるようになっていくという仮説をひとまず立ててみよう。

それを裏付けるひとつの文学的事件がある。

ジェイムズ・フライという作家が2003年に『ア・ミリオン・リトル・ピース』というメモワールを刊行した。アルコールと薬物依存からの脱却とそのリハビリの日々を描いた作品はオプラ・ウィンフリーのテレビ番組に取り上げられたこともあり、ニューヨーク・タイムズ紙のベストセラー・リストの1位を15週にわたって維持し続けた。

ところが、あるウェブサイトの検証記事をきっかけに作品の虚偽が明るみにってしまう。作品に描かれる多くの出来事は捏造、あるいは誇張されたものであり、内容は事実とはほど遠かったのだ。再びテレビに出演したフライは、担当編集者とともにオプラに糾弾され、社会的制裁を受けることになる。とくにオプラは編集者に対してなぜノンフィクションのジャンルで出版したのかを激しく批判したが、問題はメモワールに「作り話」があってはならないとするオプラの主張ではない。そうではなく、もともとフライは同じ作品をフィクションとして出版社に売り込んだものの、ランダムハウスを含む多くの出版社に掲載を拒絶されていたのだ。そして、それを「メモワール」として持ち込んだところ契約に至ったのである。

このエピソードはいくつかの点で示唆的だといえるだろう。

まず、アメリカの出版業界全体の傾向として、フィクションよりメモワール（ノンフィクション）が求められているということ。しかし、にもかかわらず、フィクションであるかノンフィクションであるかは、結局のところ作品そのものでは区別ができないということ。

では、メモワールというジャンルにおいて事実とフィクションの関係はどのように捉えられるべきなのだろうか。この問いは次のように置き換えることもできるだろう。すなわち、定義上、作者が主観的に執筆するメモワールのエピソード——その作品に描かれる物語——は誰が所有すべきものなのだろうか、と。

こうしたジャンル上の問いそのものに向き合った作品として、最後にアリソン・ベクダルのグラフィック・メモワール、『ファン・ホーム——ある家族の悲喜劇』を取り上げたい。ベクダルはレズビアンを日常を描いた *Dykes to Watch Out For* というコミック・ストリップの作家として知られるが、本作はレズビアンであることを家族にカミングアウトした数ヶ月後に、自殺とも思える事故死をとげた父親との関係を描いたメモワールである。⁷

ペンシルバニア州の片田舎で葬儀社を営み、教師をしながら自らの耽美的な世界にひきこもる父親が同性愛者であることを知ったのは、彼女自身がカミングアウトした直後のことである。つまり、「真実」を告白することでベクダルは両親から解放されるはずが、父親の別の「真実」の露呈に繋がってしまったのだ。⁸ フィッツジェラルドを愛し、「現実よ

りもフィクションを好む」人間であることが強調される父親の「真実」が、この時点ですでに一筋縄でいかないことは明らかだが、ここで確認しなければならないのは、このメモワールにおいて「真実」が常にセクシュアリティに関連する概念として語られている点である。その意味でナンシー・K・ミラーがいうように、この作品そのものがカミングアウトの構造を有しているといえる。⁹

作品はいくどとなく父親の事故／自殺の場面を振り返りながら、あらゆる因果関係の可能性を検討する。著者のカミングアウトと父親の事故は関係しているのだろうか。父親とギャッツビーが同じ歳で亡くなっているのは偶然なのだろうか。事故／自殺の二週間前に母親が離婚を切り出したことは関係しているのだろうか。

また別の場面では、子どものところに日記をつけ始めた著者が、ひとつひとつの記述の「真実性」に疑念を持ち始めた結果、すべての文章に「と私は思う」というフレーズを付け加える様子が描かれる。虚飾の世界に生きた父親の真実を追い求めるうちに「父親がリアリティとフィクションの間に引いた境界線が曖昧であること」が判明する。「死」が日常的に漂う葬儀社という空間において、それは不可避免的に事故／自殺の「真実性」を無効化してしまう。

メモワールのナラティブ構造そのものが「真実」を解体する——すべての真実(と秘密)の構造にセクシュアリティの構造が刻印されていると看破したのは思想家のイヴ・セジウィックだが、親娘のカミングアウトをメモワールとフィクションというジャンルの構造に準えつつ、私的な追想をフィッツジェラルドやジョイスなどの文学作品に重ねる手法は、メモワールというジャンルの成熟そのものを感じさせる。

メモワールはいかなる「真実」をカミングアウトしているのか——アメリカの文壇で大きな影響力を持ちつつあるこのジャンルについて、今後もその動向を注視してゆきたい。

注

¹ Lorraine Adams, "Almost Famous: The Rise of the 'Nobody' Memoir," *Washington Monthly*, April 2002, <http://www.washingtonmonthly.com/features/2001/0204.adams.html>; Frank McCourt, *Angela's Ashes*, 1996 (土屋政雄訳『アンジェラの灰』新潮社); Dave Eggers, *A Heartbreaking Work of Staggering Genius*, 2000 (中野恵津子訳『驚くべき天才の胸もはりさけんばかりの奮闘記』文藝春秋); Elizabeth Wurtzel, *Prozac Nation: Young and Depressed in America: A Memoir*, 1994 (滝沢千陽訳『私は「うつ依存症」の女—プロザック・コンプレックス』講談社)

² Mary Karr, *The Liars' Club: A Memoir*, New York: Viking, 1995 (永坂田津子訳『うそつきくらぶ』青土社、1999年); *Cherry: A Memoir*, New York: Viking, 2001; *Lit: A Memoir*, New York: Harper, 2009.

³ Nick Flynn, *Another Bullshit Night in Suck City: A Memoir*, New York: W. W. Norton, 2004 (金原瑞人、中村浩美訳『路上の文豪、酔いどれジョナサンの「幻の傑作」』イースト・プレス); *The Ticking Is the*

Bomb: A Memoir, New York: W. W. Norton, 2010; *The Reenactments: A Memoir*, New York: W. W. Norton, 2013. G. Thomas Couser, *Memoir: An Introduction* (New York: Oxford University Press, 2012), Kindle edition, 4-5.

⁴ A. J. Jacobs, *The Know-It-All: One Man's Humble Quest to Become the Smartest Person in the World*, 2005 (黒原敏行訳『驚異の百科事典男 世界一頭のいい人間になる!』文藝春秋); *Year of Living Biblically: One Man's Humble Quest to Follow the Bible as Literally as Possible*, 2007 (阪田由美子訳『聖書男 (バイブルマン) 現代NYで「聖書の教え」を忠実に守ってみた1年間日記』阪急コミュニケーション); *The Guinea Pig Diaries: My Life as an Experiment*, 2010; *Drop Dead Healthy: One Man's Humble Quest for Bodily Perfection*, 2012 (本間徳子訳『健康男——体にいいこと、全部試しました!』日経BP社)

⁵ Julie Rak, "Are Memoirs Autobiography? A Consideration of Genre and Public Identity," *Genre XXXVI* (Fall/Winter 2004): 305.

⁶ Ben Yagoda, *Memoir: A History* (New York: Riverhead Books, 2009), Kindle edition, 116.

⁷ 多くのメモワリスト同様、ベクダルもこの作品の続編で母親との関係を描いた *Are You My Mother? A Comic Drama* を2012年に刊行している。

⁸ Alison Bechdel, *Fun Home: A Family Tragicomic*, Boston: Mariner Books, 2006, 59.

⁹ Nancy K. Miller, "The Entangled Self: Genre Bondage in the Age of Memoir," *PMLA*, 122.2 (March 2007): 543.